

[研究ノート]

## 日米協同研究の実証的考察（始末記Ⅰ）

藤 田 秀

- 〈目 次〉 §Ⅰ-1 The Golden Monument  
§Ⅰ-2 The Forty Niners  
§Ⅰ-3 Who will blink first?  
§Ⅰ-4 The Lonely Battle  
§Ⅰ-5 JAPAN: What Went Wrong?

## § I-1 The Golden Monument

1994 年 4 月 7 日付で、ウイスコンシン大学のエド・ロウから、手紙が来た。我々が使っていた、初代のストーレージリングを、スミソニアン博物館に納めたいと言う。ついては、お前の意見を書けと言って来た。とうとう、あの装置も、「博物館行き」かと思った。それでも、意見を書いて送った。

1995 年 2 月 14 日付で、またエド・ロウから手紙が来た。“Tantalus and Fred Brown's original beamline” が、「スミソニアンに入ることに決まった」と言う。「それは好かった」と思って、机の上に手紙を置いた。時々、手紙を取り上げて、読み返した。2 日もたつと、「将来、もしワシントンに寄る事でもあれば、またあの装置に会える。それも楽しみな事かも知れない」と、思うようになった。

さらに 2 日もたつと、「これは、皆に喜んで貰っても、いい事なのかも知れない」と、思うようになった。それで、2 月 23 日から相前後して、大貫正実先生、大倉熙先生、神前熙先生、井口洋夫先生の 4 人の先生方にお手紙を差し上げて、事の次第を簡単にご報告した。これらの先生方は、著者のストーレージングの仕事と、いろいろなフェーズで関係のあった先生方だからである。それぞれの先生方から、お返事や、ご感想を頂いた。その中で、大倉さんから頂いたものの一部をご紹介して、この物語を始めるスタートラインにしたい：

『先日のお手紙有難うございました。MURA で立ち上げられた SORRING が歴史を刻んだものとして、Smithsonian に入り、行く行くは DC の名所を飾るという事をお聞きして、大変立派なことと感服しているところです。これで毎回快哉を叫びながら愛読していた「日米科学協力の実態」（それらをまとめていた箱の置場が、阪神大震災以来不明となり、題名の正確を期すことが出来ないのは残念ですが、事情ご賢察の上）の最終版が完成したものと、お喜び申し上げます。実の所、御掲載中は、中味は痛快に面白かったのですが、題目と



FREDERICK C. BROWN was born in Seattle in 1924 and received his B.S. (1945), M.S. (1947), and Ph.D. (1950) degrees from Harvard University. He is currently Professor of Physics at the University of Illinois, Urbana, where he has been teaching since 1955. From 1951 to 1955 he taught at Reed College in Portland, Oregon. Dr. Brown was a National Science Foundation Senior Post Doctoral Fellow at the Clarendon Laboratory, Oxford, in 1964-1965. His main research interests are the electronic and optical properties of ionic crystals, especially the alkali and silver halides, photoconductivity, mobility of electrons and holes, and color center phenomena.

〔記：学士（B. S.），修士（M. S.），博士（Ph. D.）の三つの学位をハーバード大学で得たものを，通称，“Three Degrees from Harvard”という。彼等は，博士号授与式の後の「祝賀パーティー」では，大きく口を明けて天井を向き，「生きたままの金魚」を三匹吞まされる事になっている。今でもやっているかどうかは，知らない。フレッドが，Three Degrees from Harvard だったとは，今日迄，気が付かなかった。お互いに，そんなことを気にしたことはなかったから，知っていれば，金魚を吞んだ気分とはどんなものか，聞いておくのだった。なお，オレゴンのリード大学の物理実験室には，“Hands Off! FCB”（手を触れるな！FC ブラウン）と書いたメモのある実験器具が，今でもまだフレッドの帰りを待っている，という噂もある。これも，真偽の程は聞き洩らした。

1995 年 9 月 19 日記]

内容の一致性が多少分らないままでした。然し，これですっきりしました。（以下略）1995 年 3 月 4 日大倉 熙』

最初に，このお手紙を拝見したときには，「最終版が完成したものと，お喜び申し上げます」というくだりの意味が，判らなかった。しかし，これも，くり返して読んでいる間に，やっと，「最終版をお書きなさい」と言われているのだと，気が付いた。確かに，以前まとめたシリーズでは，遠慮し

て言わなかったことも、かなりある。また、文脈上触れなかったこともある。あれから、4分の1世紀も経ってみると、もっと、はっきり言っておけば良かった、ということもある。また、「その後の話」というのも、大分貯まった。確かに、大倉さんのおっしゃるように、この辺で、「始末記」をまとめてみるのも、良いかも知れない、と思うようになった。

やがて、震災の被害からも立直られて、1995年3月27日、横浜の物理学会で講演をされるために、上京された。大倉さんは、美しいホワイトゴールの髪をきらめかせながら、年に一度は、10分講演の演壇に立たれる！それで、新横浜プリンスホテルの、「バルカローレ」(舟歌)というイタリア・レストランに、3時間を頂いて、久しぶりの積もる話を続けた。話が、ストーリーリングのスミソニアン入りの事になると、『書きなせえ・書きなせえ』とおっしゃる。これは、小林秀雄が復員兵の大岡昇平に、「俘虜記」の執筆を勧めた時に、使ったセリフだそうである。戦後の日本文学は、それにより、一時期を画することになった。大倉さんは学がある。「アメリカは、60年代とはすっかり違ってしまったから」と弱音を吐くと、「60年代は、黄金時代でしたな！それも含めてお書きなさい」とおっしゃる。いつの間にか、そんな話になった。これは「シンDOI」と思った。

大倉さんは、小林秀雄の役になり、なおも「書きなせえ」と続ける。そして、大岡昇平の、スタンダード風の文体を研究して、立派な作品になさいとおっしゃる。しかし筆者には、そんな役はとても勤まらない。確かに、「一気に読みました」とか、「読みだすと手が離せなくなるので」などというお葉書を、頂いたことはある。しかし、それがどういう事なのか、よく判らなかった。ごく最近、井口洋夫先生から、「読み始めたら止められない実にすばらしい魅力があります」という、全く予期しないお褒めを頂いて、やっと事態が呑み込めた。とんでもないことに、なっている。「気恥ずかしい」というよりも、“flattering”(褒めすぎ)と表現したい気持ちがある。もちろん、著者なりの、小さな秘密もない訳ではない。しかしそんなことは、少しも自慢にならない。例えば、中央学院の「紀要」に載っている、「文科系」

の先生達の文章は、皆、たくましくして上手なものだ。とてもかなわない。もしご興味があれば、紀要をお送りしますから、ご覧下さい。

スタウトンでの最後の金曜日に、バドワイザーの合唱に送られながら、グランビル・フィリップス社のストレート・スルーバルブを閉めた。あれから、4分の1世紀がたった。1969年に帰国してから、70年代、80年代、90年代と、10年毎に、まるで階段でも降りるように、アメリカは、ストーン・ストーンと変わっていった。20世紀を一言でくれば、後世の歴史家は、まず間違いなく、「社会主義という、人類の壮大な実験が開始され、消滅した世紀である」と、語るだろう。しかし、ひょっとすると、「アメリカン・デモクラシーにも、同じ事が起きた!」と、一言付け加えるかも知れないのである。「シンドイ」と思った理由の第一は、まず、アメリカのこの変貌である。そして、それに釣られて動いた、我国の変容である。ここまで書かなければ、「あの時代」のことは、判ってもらえまい。しかし、それはシンドイ。

或日、「東京大学物性研究所短期研究会のお知らせ。SOR-RINGから物性研高輝度光源へ。—20年の歩みと将来—」という、通知を受取った。そこには、こういうセンテンスがあった。「我国の放射光科学の歴史に燦然と輝く金字塔であります」。「始末記」を書くからには、このような、「時間軸を抜いた」文章で、「書きました」という訳にもゆくまい。もちろん、「60年代のアメリカは、いかに素晴らしかったか」と、溜め息混じりに、ノスタルジアを語るだけで済ます事も、絶対に出来ない。

我国には、20年経っても、まだ「燦然と輝く金字塔がある」ということだ。ところがアメリカ・ウイスコンシンの方は、ざっと30年も経ったとは言え、「もう使わない物なら、早く場所を空けろ。別の実験装置を入れる!」とウイスコンシン大学の、マディソンキャンパスの事務局から、せつつかれていた。この25年の間に、髪の毛も顎髭も真っ白になってしまったエド・ロウは、気の毒に、一人で悩んで居た。ウイスコンシンのスタウトンは、アメリカと言っても中西部の、それも田舎だから、のんびりしている。それで、一人去り、一人退職して、気が付いたら、OBはエド・ロウほとんど一



*Professor Kulaki, Dean of  
Engineering, Univ. of Minn., presents  
the degree*

[記 : “Professor Kulaki, Dean of Engineering, University of Minnesota, presents the degree (Ph. D.).” と読む。エド・ロウ (写真左側の人物) は、1955 年、Purdue University で学士 (B. S.) を得ている。また、1985 年、ウイスコンシン大学から、ストーレージ・リング光源建設の功績でパリンジャー賞を受けた。

(The Ballinger Academic Staff Distinguished Achievement Award)]

人になってしまっていた。ジャンク屋に見せたら、幾らにしか成らないと言った；スクラップヤードの赤錆の山というのが、タンタラスの末路というのも忍び難い；さる国にいらないかと持ちかけてみたら、「分解料・送料・組み立て料」をそちらで持つなら、「引き取ってやってもいい」と言われた；そんな金があるくらいなら、こちらで新しい装置を造るのに使うよ；という訳で、いろいろな「授賞話」とは裏腹に、エド・ロウのクリスマスメッセージは、段々と「ウイスコンシンの冬景色」のような趣を呈して来ていた。

やがて、誰から聞いたのか、自分で思いついたのか、「スミソニアンと交渉したいと思う。ついては、“Nomination”を書け」という、大変判りにくい手紙が来た。いずれこのシリーズ (Ⅲ) で詳しくお話する予定にしているが、ノミネーションというのは、誰を党の大統領候補に決めるかという、民主党大会などでやる、例の大騒ぎのことである。タンタラスの次の、新鋭

の装置は、アラジンというニックネームで呼ばれている。アラジンで活躍している、現在の研究者達は、もうベトナム戦争さえ知らぬような「若手」である。彼等が、我々のような「年寄」を、ノミネートする訳がない。第一、我々がかつてそこに居た事がある、などという事さえ知らないに決まっている。我々は、「候補者リスト」に名前さえ載っていない程の、「無名候補」なのである。ご承知のように、アメリカの選挙は、投票用紙に印刷してある「候補者」の名前の欄に、印を付けるだけである。民主党でも共和党でもない候補者は、まず当選する事などありえない。それでも彼等の為に、“Write-in”という制度がある。これは、空欄に、候補者の名前を自分で書き込む仕組みである。どうせ、そんなものは、大した数には成らない。しかし、無視してはいない、ということを示す為に、存在する制度である。それで、“Here is my Write-in.”と書いて、返事をした。その結果が、この冒頭の話に戻る。

とにかくこれで、タンタラスは、スクラップヤードの赤錆になる事だけは免れた。「中西部」は、かつてはコーンベルト（とうもろこしの主生産地帯）、或いはバイブルベルト（寝る前にお祈りをする、信仰心の篤い地帯）などと呼ばれて、堅実な保守的中間層の住む、アメリカのハートランドのように言われていた。しかし、その「中西部」は、80年代のレーガノミックスで、壊滅的状态になっていた。シカゴ・デトロイトを中心とする不況で、イリノイの工業地帯は、ラストベルト（赤錆地帯）とさえ呼ばれて居た。シカゴにあった中西部最大の銀行、コンチネンタル・イリノイまでが、資金の借り手が無くなり、倒産していた。デトロイトの街角で、92年の大統領選挙には、誰に入れるつもりかと聞かれた黒人の失業者は、“DATTA BIG MANZ BIZNES!”（そんなことは、金持ちのすることだ!）と答えて居た。もはや、60年代は遠い牧歌時代のように思えた。ここまで来てしまった軌跡を語るのには、気が遠くなる程、シンドイ。

## § I -2 The Forty Niners

「本気で書くのはシンDOI」といった第二の理由は、「人間」の話をしなければならないからである。しかしこれは、第一の理由よりは、比較的、簡単に済ませられる。それはこうである：

ウイスコンシンで、皆と一緒に仕事をしていた時には、「この連中は、フロンティアだ」と思った。帰国して、「我国の放射光科学」の仕事を見聞した時には、「この連中は、フォーティーナイナーだ」と思った。「フロンティア」と言ったのは、著者一人の発明ではない。1967年11月15日、佐川敬さんがアメリカにやってきて、ウイスコンシンを見学して行った。帰国後、佐川さんは、「ウイスコンシン大学の200 MeV ストローレージ・リング見学記」をまとめた。その中で、佐川さんは、ウイスコンシンの連中の気構えを指して、「開拓者魂」と表現した。佐川さんは、たった一日スタウトンに居ただけである。公平な感覚を持っていた人ならば、誰でも、ウイスコンシンの連中と、ちょっと口をきいてみれば、彼等がどんな人間か、すぐに判った筈である。

一口に「西へ行った連中」と言っても、「フロンティア」と「フォーティーナイナー」とでは、まるで違う。「フロンティア」は、アパラチア山脈を越えて、西側の草原に出た。東海岸の、居心地の好い、しかし汚らしい都市に住み着けず、山を越えた。誰も居ない草原に新天地を求めた。そこには、氷河が退いて以来、誰も鋤を入れたことの無い、堅い表土が待っていた。堅い土を掘り起こし、麦を播き、牛を飼い、井戸を掘って生活を始めた。一日の終わりには、草原の果てに沈む真っ赤な夕日を眺め、「明日は、今日よりも好くなる」と信じて、暮らした。事実、エド・ロウが「OK. Let's call it a day ! To-mor-row, will be mer-ri-er !」と言って、議論を締め括るのを何度も聞いた。

当時、川村肇先生の主宰する「物性」という、物理の専門雑誌があった。



そこへ、このウイスコンシンの連中の話を、3回に分けて書き送った。かなり、気持ちを抑えて書いたので、今読んでみても、そんなに変ではない。自分では、そんな心算はなかったが、伊達宗行さんはこれを、「三部作」と評してくださった。帰国して、RCAの研究所に勤めだすと、或日、田沼静一さんから電話があった。ソールのことについて、「固体物理」に、何か書いて欲しいという。もう、いまさら書くことなど、何もないと思った。「私が書くと、批判めいたことになりますから」と言って、断る積もりだった。田沼さんは、それでもいいから、思った通りのことを、書いて欲しいと言う。編集者の意図を、良く知りたいと思ったので、長い電話になった。

二つの事を書いた。一つは、軌道放射光実験の将来を、決して認めようとしない、「体制派」に対する批判である。これは、何も、今に始まった事ではなかった。アメリカでも、すでに散々苦勞して来た事である。「体制派」というのは、『事が終わらないと、自分の態度が決められない連中、の集まり』なのである。アメリカン・フットボールのコーチなら、誰でも知っている有名なジョークがある。それは、「試合が終われば、完璧な作戦が立てられる!」というのである。もう一つは、「仕事を始めている連中」に対する批判である。彼等は、「ボランティア」と自称していた。しかし実態は、「フォーティーナイナー」であった。1849年をピークとする、カリフォルニアのゴールドラッシュに押し掛けて来た連中を、“Forty Niner”という。この二つの事を、僅か3000字にまとめなければ、ならなかった。もちろん、この二つの事の間には、相互に緊迫した関係があった。「あんな連中が!」という思いが、「体制派」と、「ボランティア」の双方の気持ちの中に渦巻いて居た。(N'est-ce pas?)

「体制派」に対しては、「海外の実状」を、簡単に述べた。彼等には、「事が終わりつつある」と告げるのが、一番なのである。「ボランティア」に対しては、ブレット・ハートの西部開拓小説にある、“Roaring Camp”(ドンチャン部落、とでも訳しておきますが)の話を下敷きにして、「例え話」を書いた。ロクな準備もしないで、群がる金鉾探し。ホラを吹きまくる山師。僅か

な砂金さえかすめ取る、インチキな銀行屋。帰りの路銀さえ手に入らずに居る、浮浪者、などなどである。メッセージは伝わらなかった。“Roaring Camp”からは、「あれは、援護射撃だ」という噂が流れて来た。

しかし、フォーティナイナーの物語には、まだ書かなかった続きがある。彼等が、最後に渡る「ミズーリの大河」から、カリフォルニアの金鉱までの間には、3000 キロを越す荒地が待っていた。彼等は、ロッキーを越えねばならぬことは、知っていた。しかし、その先の、ユタ・ネバダの砂漠では、多くの若者が力つき、車輛も壊れて、倒れた。中には、まだその先に、シェラネバダ山脈が控えていることを、知らぬ者さえあった。シェラネバダには、9 月になれば雪が降る。9 月前にシェラネバダが越えられずに、山の中で凍死する者が続出した。シェラネバダを避けて、南に下った者は、果てしの無い「デスバレー」の中で、日乾しになった。だまされた彼等が悪いのか。だました山師が悪いのか。したり顔で、「案内書」を書いた連中が悪いのか。とにかく、ロッキーの西には、倒れた若者達で、「死屍累々」となった。

シェラネバダに、雪が深く降り積もる頃、我国の大学では「卒論発表」がある。或る年の冬、真隅泰三さんがこう言った。「イヤー、フジタサン。死屍累々だよ！」。

### § I -3 Who will blink first ?

アメリカの田舎町には、“A Game of Chicken”（肝だめし）というのと、“Drag Race”（加速競争）というのがある。どちらも、ひどく危険なゲームである。ドライバーライセンスを貰う時には、右手を上げて、「Game of Chicken と Drag Race は、絶対にやりません」と、誓わなければならない。

“Drag Race”というのは、クルマを二台並べて、「急発進」を競うものである。こんなことは、広い道では交通量が多いので、とても出来ない。それで、田舎町の、「片側一車線」の道、つまり “Two Way Traffic” でやるこ

とになる。イリノイは非常に平坦な所なので、道は一直線である。それと交差する道は、いつも直角である。しかも、5 キロや 10 キロ、交差点が一つも無い道など、いくらでもある。ゼロからスタートして、次の交差点まで、どちらが先に着くかを競う。我国でも、追越しをかけられると、抜かされまいとして、加速して頑張る「カーキチ」が時々居る。これも広い意味で、“Drag Race”という。いずれにせよ、片側一車線の道を、二台並んで直進すれば、ひどく危険である。アメリカならば、左側を行く者には、いつ対向車が現われるか、判らないからである。

“A Game of Chicken” というのは、もっと危険である。“Crazy” とさえ言うべきだ。これは、同じ車線の上を、二台の車が向きあって、全速力で走ってくるゲームである。もちろん、放っておけば正面衝突になる。それで、どちらが先にハンドルを切って、避けたかというのである。先に眼をつぶって (blink)、ハンドルを切ったほうを、“Chicken” (いくじなし、あるいは、女々しい奴) という。イリノイの片田舎などには、今でも、道の中央に一車線分の舗装しかしていない、昔の道が残っている。もちろん、両側には広い土の路肩がある。それで、昔は互いに避けあって、通行していたのであろう。こういう古い道は、“Chicken’s Road” というニックネームで呼ばれている。

アメリカは、入植と移民と開拓で出来た国である。実際には、大多数の者は、コロニーや都会に住み付いた。しかし、開拓者の物語は、一種の神話のように、白人のアメリカ人の、心の中に住み付いている。開拓者に必要なものは、森を切り拓く斧と、インディアンから身を守るライフルとであった。それと、「良い妻と、良い馬」ということになっている。生活は荒々しく、決して、貴族の貴公子の来るような、土地柄では無かった。従って、“Chicken” (いくじなし) というレッテルを貼られた男は、今日でも、社会的な脱落者となり得る伝統がある。これが理解できないと、アメリカの半分が判らない。たとえば、“Chicken-livered guy” (臆病者)、“Chicken switch” (パニック・ボタン)、“Chicken and fools” (ガキとアホ)、“Chicken feed” (お

涙金) などなど、Chicken の付く言葉で、ロクなものなどまずない。

昔の話をするまでもない。著者の帰国後、1972 年の大統領選挙の時には、すでに、ウォーターゲート・ビル侵入事件の報道が始まっていた。それで、ニクソンを何となく、うさん臭い眼で見る人も、かなり出ていた。ニクソンに対抗する民主党からは、マスキー上院議員が、最有力候補と見なされていた。排気ガス規制の、「マスキー法」を作った人である。大統領選挙の幕を切って落とす、ニューハンプシャーの予備選挙が近付くと、「マスキーは、フランス系のカナダ人（ケベックのこと。ケベックは北隣である）をコケにした。夫人はアル中で、大統領夫人には不似合いだ」という中傷記事が、新聞に出た。これに抗議したマスキーは、その新聞社の前で、街頭演説をやった。その日は雪が降っていた。アメリカ人は帽子を被らない。それで、雪が顔にあたり、顔が濡れていた。すると、その新聞は更に、「マスキー、メソメソ泣いて抗議」と書いた。泣きながら抗議するような、「いくじなし」は、とても大統領になどできない。「声涙ともに下る演説」に感動したりするような、日本人とは、精神構造が違うのである。たちまち、マスキーは立候補辞退に追い込まれた。この中傷が、「ニクソン再選委員会」の陰謀であったことが、僅か 7 ヶ月後には発覚した。しかし、その時には、マスキーはすでに「過去の人」となっていた。歴史に「モシ」が許されるならば、「モシあの時、マスキーが大統領になっていたならば」、アメリカの歴史は、いや世界の歴史も、全く違って居ただろう。

トルーマンが、ヒロシマ・ナガサキに原爆を落とす決定をしたいきさつは、今世紀最大の政治・軍事ドラマの一つであろう。その全貌の地平線は、今もって見えて来ない。1973 年には、ニクソンに、「ホワイトハウスをクリアして貰うかどうか」、というニュースばかりが溢れていた。それで、アメリカ人もいささかうんざりしていた。そこへ、インテリ雑誌の“Time”が、トルーマンの思い出話を載せた。トルーマンは、1945 年 4 月 12 日、ルーズベルトの死によって、突然、副大統領からのし上がった。ルーズベルトが偉大すぎたので影が薄い。彼は、うんうん言いながら、書類の山を片付けて

行った、平凡な大統領、ということになっていた。しかし、執務室のデスクの上に、“Buck stops here!”と書いたカードを立てていたという。(ポーカーゲームのお話は、いずれどこかでやりたいと思います。差し当り今は、「オレが最後の責任を取る!」という訳にしておきます。ポーカーが判らないと、アメリカの残りの半分が判りません) 何という、いい大統領だ! 今にして思えば、トルーマンが歴代最高だったのかも知れぬ。それに較べて、今の大統領はどうだ、という訳で、“t”の字を一字加えて、“Buck stops there!”(アイツが最後の責任を取る!)というカードを、ニクソンの似顔絵に添えて書いて、皮肉った。それ以来、トルーマンはいい大統領だったということになっている。しかし、戦後50年、スミソニアン博物館の、原爆記念展示問題から始まって、トルーマンの評価はまた揺らいで来た。つい最近、日系三世の書いた本で、トルーマンは、「いくじなし!」と思われたく無かったから、ゴーサインを出したのだ、という説まで出て来た。一国の最高指導者ともあろう者に、そんなことは絶対に有り得ないと、100%否定しきれないのが、アメリカである。大統領でも、“Chicken!”と言われるのは怖い。

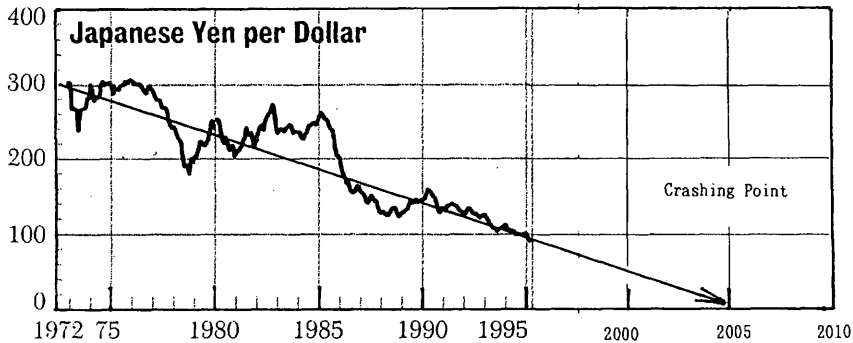
「テニアン基地に帰って来た爆撃機の搭乗員を、出迎えに出た科学者はいなかった。すでに爆撃機からの暗号無線を受け、広島を爆撃したことを知っていたからである。『連中は都市に原爆を落としたのか!』。その夜、『盛大な祝賀パーティ』が開かれたが、われわれは行かなかった。科学者はほとんど誰も出席していない」

アメリカの大統領には、決して「英明なる哲人」がなる訳ではない。アメリカは、入植と移民と開拓で出来た国であるから、ピンからキリ迄が集まっている。その落差は、日本に居ては想像も出来ない。華嚴の滝と、ナイヤガラ程の違いがある。アメリカの知性を代表する層は、非常に聡明で、おそらく我国の水準を、遥かに超えているであろう。しかし一方、低い方も果てがしれない。それでも何とか、ここまでやって来た。それが、何時から、こんなに質が下がりだしたのだろう。それは、今にして思えば、ニクソンが大統領になった時からであると思われる。

ニクソンの前にはジョンソンが、ベトナム戦争の“Credibility Gap”（不信感）でガタガタになっていた。彼の掲げていた「グレート・ソサイエティ」は、軍事費も福祉費も必要とする政策で、アメリカをもってしても、もはや実現不可能であった。ジョンソンの前にはケネディが、ソ連の「スプートニク外交」と、「キューバ危機」で攻められて、「アポロ計画」で反撃していた。その前にはアイクが、U-2 のスパイ飛行で、フルシチョフに責められていた。更にその前には、マッカーシーのヒステリーが、赤狩りでわめいていた。それでも彼等大統領は、皆必死で、真面目だったように思われる。それが、ニクソンが大統領になってからは、「狡猾」という要素が加わった。1968 年 6 月 5 日、ロバート・ケネディ候補が、ロスアンジェルスのアンバサダーホテルで、民主党予備選祝賀会の時に撃たれた。これがことの始まりだった。

ニクソンが大統領に当選した時、われわれは、ウイスコンシンのマディソンのホテルで夕食をしていた。PSL の所長のフレッド・ミルズが、「アメリカは素晴らしい国だ。ニクソンのように、一度落選した人間でも、また大統領にカムバックすることが出来る。独裁国家では、決して考えられない事だ」と、誇らしげに話した時、エド・ロウもチャーリーも、皆鼻白んでそっぽを向いた。

第一図は、この 23 年間のドル・円レートのグラフである。ここにアメリカの変貌が、余すところなく現われている（と思う）。これは「経済のデータ」であるから、「経済理論」は何んと言っているか、「時間と予算」の許すかぎり調べてみた。すると驚いたことに、「お手上げ」・「処置なし」・「理解に苦しむ」・「破局は避けがたい」などというのが、「専門家」の言っていることの、殆ど総てである事が判った。「経済学」には、「マルクス経済学」と「近代経済学」あるいは「計量経済学」の二派があつて、激しく死活を賭けて、いがみ合っている、とは聞いていた。ソ連が崩壊し、「マル経」が「喪家の狗」のようになると、「近経」は安心したのか、いろいろな舞台裏を見せ始めた。今までは、互いにファサードを向けあつて、猫の喧嘩のように唸



第1図 ¥/\$ レートの経年変化 (Newsweek, March 20, 1995, p. 11)

り合っていた。「経済学」は、「人文科学のクイーンである」とさえ聞いていた。その意味は、数ある人文科学の中で、「数量的に扱える、最高の学問である」とのことであった。それで、その「数学的手段」を覗いてみると、驚いた。詳しい話は、次回にでもする予定であるが、「経済」などやらなくて、よかったと思った。(しかし、「物理」だって無罪放免という訳ではない)。

第1図の意味することは、(著者の意見では)バージニアに初めて植民地が建設された1607年以来、約400年後に現われた、アメリカ社会の、「相転移」の反映なのである。このような「相転移」に際しては、簡単な「数学的手段」の無力なことは、少し数学の判る理科生ならば、すぐに理解できる。では、何故、どのようにして、この「相転移」は発生したか。その、「本質的な議論」(と筆者が信じ込んでいること)は、次回以後に回したい。ただここでは、「現象論」として、二つのことだけを指摘しておきたい。一つは、これは、“A Game of Chicken”なのである。今や“The Crashing Point”は眼の前である。“Who will blink first?”

1992年1月、ブッシュが宮中晩餐会でゲボを吐いたとき、“Golden Parachute”(3000万ドル以上の退職金を受け取って天下る者)のアイアコッカも来ていた。彼はアメリカ出発前に、こう言って居た。「円高に追い込むこと

によって、日本の基幹産業、たとえば自動車・鉄鋼などは、完全に破壊する事が出来る」。

「現象論」の二つ目のポイントは、ではこの、“The Crashing Point”の日はいつか、である。フランス映画のセリフではないが、「私には、カレンダーの上で、正確に示すことさえできる」。それは、2004年12月8日である。この日、1ドルはゼロ円になる。それは、「通商不能」、つまり「戦争」と同じである。実際は、1ドル40円にもなると、政府（公的資金）も、企業（機関投資家）も、やっとアメリカの意図を悟って、悲鳴を上げて、蜘蛛の子を散らすように、ハンドルを切るだろう。対米不動産投資だけでも、総額770億ドル。恥ずかしくて、公表も出来ないほど買い込んだ、アメリカ国債は、すべて紙屑となる。かくて、国民が（あるいは社員が）、営々として貯えた我国の財産は、ことごとく「ドブに棄てられる」。その日は、2001年3月31日になるだろう。

## § I -4 The Lonely Battle

「シンDOI」と思った三つ目の理由は、個人的なものである。個人的な理由であるから、第三者には面白くないかも知れない。実は、この10年の「回り道」に、かなり疲れていた。また、やっともとの道に戻りかけたので、一休みしたら、「別のこと」をしたいと思っていた。それで、これ以上、「エネルギーと時間の積」（エルグ・セカンド）を、他のことに取られたくないと思っていた；

或る日、思い立って、「我国における半導体研究外史」を書き始めた。それまでの、我国の半導体研究の歴史を書いたものは、技術開発の話が、殆どだったからである。アカデミックな、研究者サイドのことなら、少しは自分にも書けそうに思えた。またそこに、オリジナリティを出せるかも知れないと考えた。「これまでの歴史は、成功の観点から書かれてきた」というニーチェの言葉がある。一方には、「シリコン工業が、半導体研究をダメにした」



という、川村肇先生のステートメントがあった。それならば、いっそのこと、「ダメになった歴史」を書いてみようかと思った。この手の「歴史」の最たるものには、「平家物語」がある。「我国における、半導体研究の平家物語」は書けないか、と考えた。「我国の話」だけでは舞台が狭いので、何と言っても息が詰まる。それで、「アメリカの話」を適当に散りばめながら進めば、いけると思った。この程度の気持ちの準備でスタートし（てしまった）。

すると忽ち、これは大変な仕事だ、という事が判った。まず第一に、「事実の確認」さえもが難しい。僅か40年たらずしか経っていないのに、多くの記録が、もう深い霧の奥に消えかかっていた。幸いに、同じ事を扱っている複数のステートメントが見つかったも、その人達の「価値判断」による、「異なった評価」で厚く覆われていて、正体が見えない。これでは一体、何が「事実」なのかさえははっきりしない。たちまち、「事実とは何か」という、大変な問題にぶつかった。

そこへ、宮川渕さんから強力なパンチが来た。「年寄りの昔話が、若い人達の歴史になるのかな？」と言うのである。もちろん、「歴史と昔話は違う」と直感した。しかし、結論は判っていても、学力がないので証明が出来ない。それで、有名なエドワード・ハレット・カーの「歴史とは何か」から始めることにした。有り難いことに、中央学院には、佐藤進さんという歴史研究の専門家が居た。彼は「古代オリエント史」というのが、専門であった。また、古代オリエント学会の役員もしていた。国際キリスト教大学の側には、「中近東文化センター」というのがあり、そこへ彼と一緒にいくと、館員が皆、彼にお辞儀をした。古代オリエント史というのは、有るか無いかの文献や物証を綴って、「歴史」を築く学問である。

幸い家が近いので、毎週一回、帰りが一緒になる日がある。それで何時のまにか、講義を済ますと、「軽く一杯」と言っ、吉祥寺の「ラインゴールド」というドイツ風レストランに、いつも一緒に寄ることになった。レストランは地下室なので、5時頃からビールを飲み始めても、少しも後ろめたい

気持ちはいらない。いつも 8 時頃迄話し込んだ。もちろん雑談もするが、ずいぶん「歴史」の話も聞かせてもらった。この「軽く一杯」は、5 年間程続いた。やがて、佐藤さんが他校に栄転になって、終わりとなった。その間に、「歴史」とは、「歴史家」による「認識」の問題であること；そして、それは結局、「哲学」の問題であること；更に、それは、自然科学、あるいは「物理」に於いてさえ、違わない問題であること；などが判って来た。

いつの間にか、ラインゴールドの方も随分と変わった。最初の頃は、フロアの隅にグランドピアノがあった。時々、美人のピアニストが「テネシーワルツ」や「シェルブールの雨傘」などを、のんびりと聞かせていた。やがてピアノを取り払って、フロアを広げると、青いチロルハットに、真っ赤なチョッキ、それに半ズボンというスタイルのアコーディオニストがやって来た。それが時々、「パリの空の下」などという、服装とはチグハグな曲を聞かせた。やがて、クラシック・ギタリストに変わった。立ったまま、片足を客席の椅子に乗せると、「アルハンブラの思い出」や、「グラナダ」などの難曲を器用に弾きこなした。惜しいかな、客席は広く、客は騒がしいので、クラシックギタリストは直に嫌気がさしたらしく、来なくなった。店舗改装で 1 ヶ月程休むと、今度はバイオリニストがやって来た。彼が弓をスーッと一引きすると、そのバイオリンが恐るべき物である事が、たちまち判った。バイオリンの胴の横に、発信機が付いていて、天井の四隅に、新しく仕掛けた大型のスピーカーから、大音響のバイオリンが、降るように鳴り渡るのである。テーブルの会話がほとんど聞き取れない。彼は、30 分弾いて 1 時間休んだ。それで、バイオリンが鳴っている間は、拝聴する他はなかった。そして、バイオリンが終わると、急いで話を続けた。ただ、そのバイオリニストは、恐ろしく器用だった。もちろん、通俗演奏風ではあるが、ほとんどあらゆる曲を弾きこなした。「ラ・カンパネラ」であろうと、はたまた、パガニーニの「カプリース」であろうと、平気で弾きまくった。そして、一曲仕上げると、軽く一礼するだけで、今度は一転して、「シノメモーロ」(死ぬ程愛して)などを、平然として悩ましげに聞かせた。リクエストされても、知

らないという曲はないらしかった。それでよく、休憩中は客席に呼ばれて、ビールをご馳走になって居た。

「我国における半導体研究外史」も大分進んだ頃、これだけでは息が詰まるので、気晴らしに、一回おきに、「日米協同研究の実証的考察」という大げさな題をつけて、「イリノイ・ウイスコンシン物語」を書き始めた。いつかは、書いてみたいと思っていたからである。いろいろと古い資料を引っ張り出し、昔のことを思い出してみると、60年代のアメリカというものが、二度と戻れない懐かしい日々に思えた。これは個人的な感傷だけで言うのではない。「ジニー係数」という、(大した内容のものではないが)、「財産・収入の分配の平等度」を表す経済係数がある。それが、1947年～89年の42年間のデータの中で、まさに著者がアメリカにいた66年～69年がミニマムになっている。あの頃のアメリカには、壊れやすいが、希望らしいものがあった。マルチンルーサーキング・Jr が、びっくりする程の美しいテナーで、“I have a dream!”と始めて、黒人の子と白人の子が、一緒に同じ学校に行く日が、いつかはくると演説していた。(もっとも、実際は、学制改革が始まり、自分の子供が黒人と同じ学校に通う事になった家では、どんどん、郊外へ引っ越していったが)それを、黒人も白人も黙って聞いていた。今日、もし彼が同じ事を言ったら、ただ野次り倒されるだけだろう。

ラインゴールドでの歴史談義は、やがて「哲学」の話になった。それで、中央学院の哲学専門の、齋藤慶典さんをお願いして、学内の有志が集まって、3回ほど「座談会」を開いた。そこで知ったことは、驚くべきことだった。「自者 vs 他者」あるいは「主体と客体」といった、古典的な「二元論」は、「哲学」の世界では、もはや時代遅れになっているというのである。自然科学も、「人間対自然」・「主観と客観」などという「基本的神話」に安住しては居られない、という。

一方、「我国における半導体研究外史」の執筆の方も、資料不足に悩んで居た。或る真夜中、こんなでは、半導体研究の「現代史の資料」を、今のうちに集めておかないと、何もかも、すぐに無くなってしまおうだろうという、

不安な気持ちになった。「今」という時代に、同時に生きている者の長所を、最大限に生かす道は、「生き証人」の人達の、インタビューを集めておく事だと思った。それで、いろいろと構想を立てて、インタビューをお願いしたい方々の、リストを書き出してみた。すると、思わずゾツとした。リストには、ご高齢の方々が多いのである。背筋が凍るとはこのことであった。どうしてももっと早く、気が付かなかったのかと思った。

インタビューの「方法論」は、明らかだった。「主体と客体」とを二つに分け、自分は「第三者」のような顔をして、「出来るだけ客観的なデータを取る」などと、偉そうな、しかし幼稚な、事を言っている場合ではない。TV キャスターのインタビューとは違うのである。インタビューする自分も、小さいながら、「研究対象の一部」、つまり「半導体研究者の一員」であった。まさに、「主体は客体の一部」であり、「客観性は、相互主観の中から抽象する」他はなかった。かといって、「哲学」の勉強を、ニーチェからモランまでたどり、じっくりと、インタビューの「方法論」を完成してから、仕事に取りかかる、などという時間のゆとりは、もう無かった。とにかくここは、「新しい方法論」を手探りで求めながら、進めて行くより他はなかった。また、大きなチームを組んで、一点集中の中央突破（Center Plunge）をくりかえしながら、最後にはフォワードパスを決めるなどという、華麗なプレーを展開している暇も無かった。

1986年4月11日（金）、目白の日本女子大に、岡田利弘さんを尋ねて、第一回のインタビューを始めた。出来ばえは余り良く無かった。第一に、岡田さんとは面識が無かったのである。インタビューが終わると、突然激しい雷雨となり、大きな雷鳴がとどろいた。日本女子大の玄関で雨宿りをした。一体この雷鳴は、門出を祝う祝砲なのか、それとも、シェークスピア劇の幕開けのような、不吉な前触れなのかと、思った。

一方、多少は、研究費も必要だった。さしあたり、録音テープと原稿用紙と旅費が欲しい。幸い、当時の中央学院の総合科学研究所（総研）のスタッフには、この仕事の意義を判ってくれる人達が、かなりあった。彼等は、

「我国の半導体研究」と聞いただけで、「物理」の事など何も判らなくても、この仕事の意義を理解してくれた。ただし、「個人研究」では都合が悪いから、「グループ研究」にしてくれという。グループを作るのは、学外の人とでも構わない。グループとは、最低 2 人だけでもよいという。それで、国府田隆夫さんをお願いして、参加してもらった。中央学院の「総研」には、佐藤寛さんという、若手の熱心な人がいた。彼は、「まだどこもやっていない仕事なら、どんどんうちが、先頭を切ってやりましょう。千葉大も東大も抜いて、うちを全国のメッカにしましょう!」と話は、果てしなく大きくなった。

このプロジェクトの最初のシリーズは、3 年間続いた。この間、新幹線の旅費・ホテル代・最後の「資料集」の印刷費まで、一度も不自由を感じたことは無かった。ただし、「備品」だけは買えない。当面、RCA 時代に自分で買ったソニーのテープレコーダがあった。国府田さんが、科研費を申請して、テレコを買うべきだと何回もいうので、手続きをした。科研費の申請をするのは、これが初めてであった。神田如水会館の、汚らしい地下室へ申請書を貰いに行くのに半日。文案を考えるのに半日。申請書を 3 枚清書するのに 1 日掛かった。たった 20 万円の研究費が、それでも降りない。「バカバカシクッテ、コンナコト、ツキアッテラレルカ。人ノ時間ヲ何ダト思ッテヤガル!」と、一度でやめた。

テレコの方は、前後 6 年間の仕事で、小型のソニーが計 4 台壊れた。機械の取り扱いについては、人よりも丁寧なつもりで、物持ちは良い方だった。それでもソニーは、続々と壊れた。しまいには、オートリバース型のものが、途中で勝手に反転する始末となった。それで修理に出すと、「どこも悪くありません」といって帰ってくる。勝手な反転は、いつ起きるか判らない。それで、かなり時間を掛けて調べないと判らない。それだけの事をしていないである。“It's a SONY.”と宣伝しているが、“It WAS a SONY.”などと、鳩山さんに言ってやりたかった。

計画の前半が無事に終わり、8 人のインタビューを小さく一冊にまとめ

て、「総研」から出版した。計画全体が完成するのを待って、それから「堂々たる一冊」にまとめ上げる気持ちなど、最初から無かった。インタビューに応じて下さった方々に、一刻も早く成果を届けたいと、そればかりを考えていた。計画の半分が仕上がったので、少し安心した。後半は落ち着いて仕事が出来た。こちらも3年がかりとなり、合計6年かかってしまった。最初の計画では、前後4年で終わらせるつもりだった。

人はどう見ていたか知らないが、このインタビューによって、「物理学史」の専門家に転身しようなどと、考えたことは一度もない。「物理学史」をライフワークにしたいなどと、思ったこともなかった。それでも、八王子の中央大学で、物理学会が開かれた時には、「物理学史」の会場に出席してみた。しかし直ぐに、世界中どこにでもある、「ヒストリアンとアーキビストの食い違い」を感じた。「歴史は歴史家が作る。だからこそ、歴史は書き替えられるのである」と考えている、「ヒストリアン」と、「資料の保存が大切だ。酸性紙は早く中性紙にコピーし直し、和紙で作ったコヨリで綴じるのが一番だ。クリップでは錆が出る」というような話に身を入れている、「アーキビスト」との間には、あまりにも大きな開きがありすぎた。

そこへ、物理学会から、「半導体資料蒐集」の経験に基づいて、提言を書けと言ってきた。いろいろと考えてみたが、やっと確立した「方法論」について、書いてみようと思った。「科学が行なう記述は、われわれの質問活動と切り離すことは出来ない」という考えを、かなり判りやすく書いた。「主客の分離は不可能で、主体は客体の一部を構成している。客観性は、相互主観の中から抽象される」という、現代ではありきたりの言い分である。多分、何か言ってくるだろうとは思っていた。しかしこれは、本で読んだ抽象論を振り回しているのではなく、インタビューという、自分で稼いだ小切手の、裏書きをしているのである。そのくらいの理解は、してくれるだろうと思っていた。

ところが、「レフェリー」の言ってきたことは、まったく驚くべきことだった。「冒頭の漫談調の文章；事実在即した記述を中心に、もっと地道な考

察を；くだけすぎた雑文；現代史研究には、インタビューという特別な方法がある。自分でそれをやってみた。その場合の注意すべき点はこうだ；徹底的な事前の準備；自由に話してもらうことと、必要最小限の誘導とのバランス；et cetera！」。要するに、言うことは細々したことばかりで、本質的なことは、何も無かった。

強いて彼等の「論点」を抽象すれば、こうなる；「人間は、人間が客観的に記述する自然に対し、外部から支配する立場にある」。彼等は、実に、皆「神学」の徒であったのだ。驚いた。こんな連中と付き合っていたら、いくら時間があっても、とても足りない。それでこう返事をした。「全くバカバカシイコメントばかりで、オ話ニナリマセン。せっかくのお誘いでしたが、今度のことはなかったことにしましょう」。やがて編集委員会の返事が来た。「執筆者のみならず、閲読者、編集委員会を含めた3者の間の協同作業であることを、まず、御理解頂きたい」。

それは、3者が“equal footing”にある場合であることを、忘れている。自分達の「無知と不勉強」を棚に上げて、「協同作業」だなどとは参った。伊達や粹狂に、「ラインゴールド」で5年間も、エレキバイオリンを聴いていた訳ではない。遊び半分に、「哲学の勉強会」を開いた訳でもない。しかもその経過は、逐一、学内紀要に発表し、皆様にも別刷をお配りして来た。ただ、あなた方は、「科学が自然哲学の原理を、発見しつつあるのは、自明だ」と信じ続けている。「このうぬばれを、認識論的保証が消失しても、持ち続け」ている。これこそが、「近代科学の根底にある、基本的神話である」。この議論を始めれば、おそらく終わりはない。何故ならば、そこには「レフェリー」の人達の、過去の「研究業績の全て」を、ゼロにしかねない、爆弾が仕掛けられているからである。彼等は死ぬ迄抵抗するだろう！ 筆者にしてからが、この「苦汁」をラインゴールドのビールと一緒に呑み乾すまでには、5年の歳月がかかっている。

このやり取りは、「資料保存と現代物理学」という題で、紀要に発表した。全部で50部程別刷を作り、皆様にお配りした。その中で、川村肇先生唯一

人が誉めて下さった。筆者にとっては、それで充分だった。

理論屋はいざ知らず、われわれ実験屋が、この 30 年間にやって来たことは、一体何だったのか。それは、「物理的な実在に手を加えて、可能な限り理論的記述と合致するように、『演出』させること」ではなかったのか。「研究対象となる現象を、採用した概念構成と合致するような、ある種の『理想状態』に近づくまで調整し、孤立させること」ではなかったのか。この意味で、「実験法は、まさに『芸術』(“state of art”)であった」。要するに、「記述の時代」に過ぎなかったのだ。我々は、愚かにも、それを誇りにさえ思っ  
て来たのではなかったのか。これこそが、この 30 年間の、われわれの「反省」の、出発点であるべきだ。

いや、それならまだマシだ。「大きな研究費が来れば、先端的な研究をして、業績が出来、これがまた研究費獲得につながる『いい循環』に入る。来なければ、悪循環に陥る」などと、ただの「経済主義」を、真面目にいう人さえ居る。

さらに、別な人のいうのはこうだ；「日本の大学の先生が文部省の科学研究費による研究成果報告の際によくするように、イギリスの先生もまた『作文』をするであろう。しかし作文とは、できてもいないのにできたかのように(あるいは将来すぐできるように)誇大に書くことなのだから、厳密に言えば嘘を書くことになる。このように学者が『嘘』を毎年事務的に書くようになれば、彼等の学問的良心 intellectual honesty はすっかり腐ってしまい、学界は頹廢してしまう。にもかかわらずその場合、書類上は『条件』を満たしており、資金は有効に使われたことになる」。(Quelle histoire !)

この 30 年間の我々は、「真の自然哲学の原理を発見する」どころか、「手から口へ」の、ただの専門家集団に成り下がって居たのではなかったか。これこそが、われわれの 30 年間の反省の、出発点であるべきだ。

まだ、やっておきたいことが残っていた。「RCA 基礎研究所興亡史」を書いておくことである。1960 年代には、「研究所ブーム」があって、我国にも沢山の研究所が創られた。しかし、それらの研究所の顛末について、述べら



れたものは、あまり見た記憶がない。その理由の一つは、RCA の場合のように、「閉鎖」という、劇的な終わり方をしたものが、他にないためかもしれない。RCA のような「外資系」の研究所が、我国の中でどのような活動をしてきたか。そして、何故、店を閉めなければならなくなったのか。善かれ悪しかれ、それを「記録」しておかなければと、思った。

「RCA 基礎研究所興亡史」は、3 回に分けて書いた。その中で、研究所を、3 通りに潰してみせた。1 回目は、研究所の運営にあたっては、「所長のキャラクター」というものが、いかに大切な要素であるかという観点から。2 回目は、「経営者のモラル」というものが、いかに大切な要素であるかという観点から。3 回目は、「研究員のクオリティ」というものが、いかに大切な要素であるかという観点からである。終わって見れば、ごく当たり前のことばかりであった。

新横浜で、大倉熙先生にお会いした時には、丁度、「RCA 基礎研究所興亡史(Ⅲ)」を書き上げた所であった。長い“Lonely Battle”のトンネルをやっと抜けて、ずいぶん疲れていた。それで、当分休みたいと思っていた。

## § I-5 JAPAN : What Went Wrong ?

マディソンのホテルのレストランで、よく、エド・ロウ、チャーリー、クリスチャンなどと、「ワシントンの冷たい風」を嘆いた。スタウトンの、ストーリーリングの仕事の将来など、どうなるか、判ったものではなかった。ホテルの外では、ウイスコンシン大学の学生達が、キャピトルヒルに集まって、ベトナムの停戦を訴えて騒いでいた。マッカーサーの、有名な「老兵は死なず! (“Old soldiers never die!”)」を引用し、「若い兵隊だけが死ぬのだ! 俺達には停戦を要求する権利がある!」と叫んで、零下7度の寒風の中で、放水車の不凍液を浴びていた。しかし、彼等はスサンデはいなかった。むしろ反対に、“Make Love! Not War!”と主張する、「優しい男の子」というのが、時代の主流を占めていた。そして、その横には、大抵、

「ミニスカートにブーツ」姿の女の子が並んで立って居た。アーバナから、スタウトンに出掛ける田舎道のドライブに、半日も一人でシカゴの放送を聞いていると、必ず二、三度は、ブラザーズ・フォーの「グリーンフィールド」のリクエストが掛かった。<sup>(\*)</sup>それを聴くと、やはりホットした。当時は、リバプールの連中の方が、アメリカの若者よりも、何故か、やたらと元気に騒いでいた。<sup>(\*)</sup>「巻末・APPENDIX 参照」

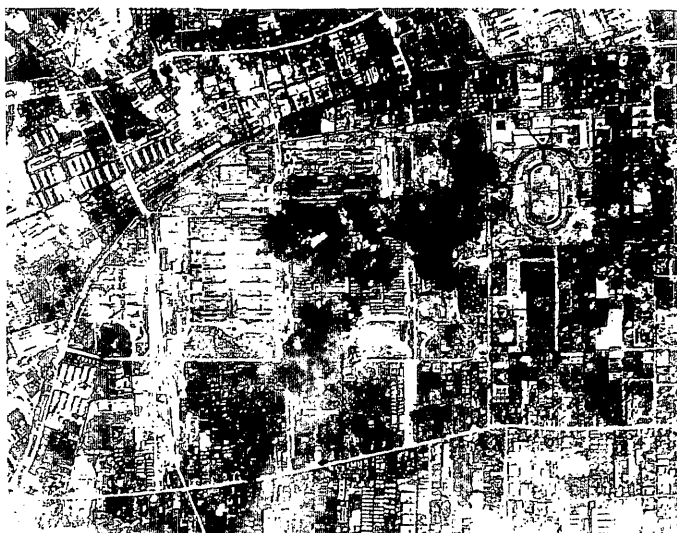
当時の学生達も、今や中年となり、アメリカ中産階級の没落や、企業のリストラなどに、悩まされているに違いない。しかし当時の彼等には、爆撃というものが、どんなものであるのか、敗戦ということが、どういうことであるのか、まだ全然判ってはいなかった。「君等には気の毒だが、君等はまだ、何も判っちゃ居ないんだ!」。そう思いながら、窓外の暗がりの騒ぎを聞いていた；

東京近郊には、立川に「日立航空機」、三鷹に「中島飛行機」、吉祥寺に「正田飛行機」という、飛行機工場群があった。吉祥寺の駅から南へ 20 分程歩くと、「正田飛行機」に着く。そこで、戦闘機のエンジンの、クランクシャフトを削っている工具の、横に並んで立った。旋盤のバイトの先には、いつも、茶色な切削用のオイルが流れている。それだけの工夫で、切削速度が、今迄の 2 倍に上がったとのことであった。全工場がそれを採用した。今迄が 100 機なら、これからは 200 機だという。オイルがどんどんと、旋盤の下の方台に貯まる。それを汲み上げて、上のタンクに戻す。この作業を一日中続けた。間もなく、いつも昼頃になると、空襲のサイレンが鳴るようになった。すると、仕事を離れ、2 キロメートル四方もありそうな、枯れた芝生畑の一角に移動して、腰を下ろして、のんびりと空襲の終わるのを待った。青空の一角には、一万メートルもありそうな高い所に、白い美しい飛行機雲が一条現われ、西から東へ、ゆっくりと延びていった。上級生は、皆一斉に、カバンから本や参考書を取り出し、黙って一生懸命に読んでいた。彼等は、すでに一年以上も学校を離れ、皆、勉強に飢えていた。本を読んでいるのは動員学生、雑談しているのは工具と、一目で判った。

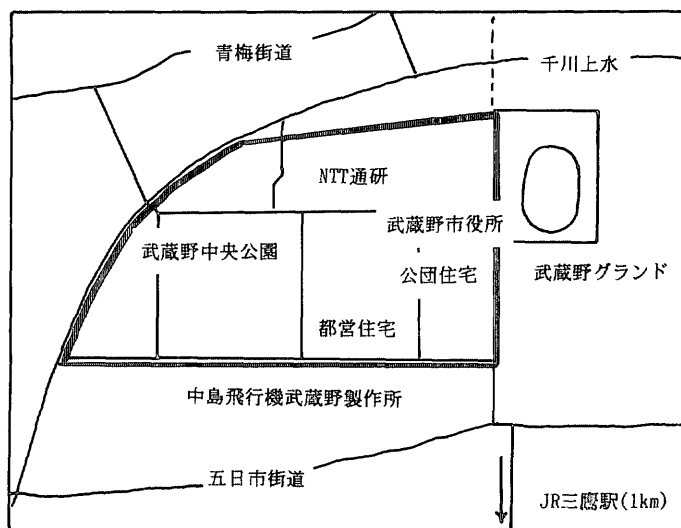
或る日、芝生の所に、「今、中島飛行機が爆撃されている！」という知らせが、電撃のように伝わってきた。その時になって初めて、我々がいかに危険な所に居るか、ということが判った。それからは、全てが一変した。空襲のサイレンが鳴ると、班長が怒ったような顔をして、大声で「退避！退避！」と怒鳴った。我々は、皆駆け足で芝生畑に避難した。たまたま食事の時には、食べかけの食器を放り出して、駆け出した。中島飛行機の爆撃は、連日のように続いていた。家の近所に、高橋睦子という女子学生がいて、中島飛行機に動員されていた。やがて、朝になると、出掛けるのがいやだといって、泣きだした。夜になって空襲のサイレンが鳴る頃になると、いつも「コワイーッ！」と高い声で、泣いているのが聞こえて来た。それを聞くと近所のオバサン達は、「可哀相にムッチャンは、よっぽど怖い目に遇ったんだね！」と話しあった。

やがて、爆撃コースの下手にあたる、井の頭公園の中には、目標を外れた爆弾がつくる大きな穴が、いくつも出来た。近道をしようと、公園の中を通っていると、とんでもない方向で、「ドッカーン」と爆弾が炸裂した。それは、不発弾であるとも、時限爆弾であるとも言われていた。ついに、井の頭公園は、立ち入り禁止となった。八千メートルもの上空から爆弾を落とすのだから、目標を外れるものは沢山ある。それで、西荻窪の麦畑の中にまで、いくつも大穴をあけた。それは、小さな家なら、入りそうな程の穴だった。穴のへりには、人だかりがしていて、在郷軍人のような人が、「こんな所に爆弾を落としやがって。間拔けな奴等だ！」と言っていた。彼には何も判っていなかった。

1945年3月10日、夜中に突然警戒警報が出て、叩き起こされた。それまでの空襲は、いつも昼間だったので、何事だろうと思っていると、やがて警戒警報が解除になった。やれやれと思って、電灯を点けると殆ど同時に、「ドッカン・ドッカン」という凄惨な音がして、飛行機のエンジンの音が、ごうごうと響いた。あわてて庭に出てみると、夜空一面にサーチライトの光が動き廻り、見たこともない程の低空を、銀色に光る大きな爆撃機が、数え



中島飛行機武蔵野製作所の爆撃(1945年4月7日)「日本空襲」



現在位置との比較

きれない程次々に、東の空へ飛んで行った。永福町や大宮公園の高射砲陣地から、ドカン・ドカンと高射砲が撃ち出され、爆撃機の後を追って、赤い火が炸裂していた。風が強く、庭の前の竹藪が、ザワザワと大きな音を立てていた。やがて、空襲警報のサイレンが鳴った。その時には、すでに東の空は、中天まで真っ赤に染まっていた。遠くはあるが、見たこともない大火事だった。

次の日、「深川が、震災の時よりもひどくやられている」という噂が、伝わって来た。道には憲兵が出ていて、用の無いものは通してくれない、と言われていた。数日すると、新聞の一面を使って、昭和天皇の被災地視察の記事が出た。記事には記者の署名があった。その記者は、中国戦線に従軍し、「一枚の原稿用紙の重さに泣く」という文章で、長行軍の辛さを表現して、一躍有名になった記者であった。記事の見出しは、大倉さんのご指摘によれば、「御徒歩にて焦土を嚮（ミソナワセ）給う」というのであったそうだが、筆者は覚えて居ない。とにかく、焼け跡を歩く、軍服姿の昭和天皇の写真と一緒に、記事が印刷されていた。父は、その長い記事を読み終わると、「こういうのを、チョーチン記事というのだ」と言った。父に続いて読んでみた。「美文調」であるのは判ったが、何がチョーチンなのかは、判らなかった。

やがて、毎晩のように、夜中になると空襲になった。その度に外に出て、遠くの大火を眺めた。「あれは御徒町の方らしい」、「今晚は、王子の方らしい」と、皆が話していた。沢山の火の粉が、空からバラバラと降るのが見える。しばらくすると、ダンプカーがジャリをあけるような、「ザーッ」という音が、必ず聞こえて来た。何だろうと、いつも不思議に思っていたが、後から判ったことは、それは、焼夷弾が一発ずつ、地面に突き刺さる時の音なのだった。

1945年5月25日の空襲は、とても近く、目の前の世田谷方面に大火が起きた。沢山の火の粉が舞い上がって、飛んで行くのが見えた。どこから撃つのか、都心からも、高射砲が盛んに撃ち上げられた。ついに一機が、火を

噴いて墜落していった。それは、思わず息を呑むような光景だった。タンクから洩れたガソリンが、空一面に広がり、それに火がついた。火は、黄色に光り輝く大きなじゅうたんを、空に吊り下げたように見えた。その黄色な光の中を、真っ逆さまになった大きな爆撃機が、火事の明かりを受けて、真っ赤に染まりながら、ゆっくりゆっくりと、音もなく、地上の大火の中に沈んで行った。

やがて母が、「今日は焼け出されるから、穴を掘ってちょうだい」と言った。庭の隅に大きな穴を掘り、柳こうりを二つと、非常持ち出しの袋を、二つ入れた。急に、あたりが真昼のように明るくなった。見上げると、銀色に光る爆撃機が一機、照明弾を点々と並べて、近くに落としていた。その明かりの中で、かねて小さなミカン箱に入れてあった本を、箱ごと穴に入れた。石原純の「世界の謎」と「私達の日常科学」、山本一清の「天体と宇宙」、それに「漢和大辞典・上下」である。穴に土を掛け終わった時には、照明弾の明かりも消えて、あたりはまた、一面の真っ暗闇になっていた。妙な静けさの中に、爆撃機が一機、サーチライトに照らされて、低空をゆっくりと抜けて行った。

再びあたりが暗く静かになった時、遠くから、「焼夷弾が落ちるぞ!」という声が聞こえて来た。家の周りは、皆田舎に引き揚げてしまっていて、空家ばかりだった。それで、その声は「お隣り」ということだった。見上げると、赤い小さな火が一つ、まるで蛍でも飛んでいるように、ふらふらと揺れていた。どうして、あんなに揺れるのだろうと思う一方では、一発なら、消し止められるだろうと思っていた。

やがて、赤い火がふっと消えた。すると、すぐに「ターン」という大きな音がして、何かが、家の前の大きな樺の枝に当たった。太さ 10 センチ程もある長い樺の枝が、「メキッ」と折れて、「ばさっ」とばかりに垂れ下った。(後で判ったのは、それは「M 69 集束焼夷弾」の一部で、48 発の小型焼夷弾を束ねていた、頭部の重い鉄の蓋だった)「危ないっ!」と思って、反射的に玄関の軒の下にしゃがみ込んだ。途端に「パスッ・パスッ・パスッ」と音がして、焼

夷弾が3発、5メートルと離れていない門の前の道に、立て続けに突き刺さった。「はっ」と思ったつぎの瞬間、あたり一面は火の海に変わっていた。

それは、まったく不思議な光景だった。一体こんな事が、あるのだろうかと思った。燈明ローソク程の小さな炎が、あたり一面無数にチロチロと燃え上がって、音もなく揺れていた。まるで、カソリック教会のクリスマスのミサか、クリスマスのイルミネーションのように、小さな炎がびっしりと燃え上がっていた。家の横板にも、軒にも、庭にも、生け垣にも、竹藪にも、じゅうたんを敷き詰めたように、5センチと間を置かず、並んで立って燃えていた。あたりは何の音もなく、全く静かだった。幸いに、しゃがんでいた所は、半開きになっていた門の、扉の陰に当たっていた。それで、一滴も火を浴びずに済んだ。そのかわり、門の扉には、びっしりと火が並んで着いていた。これではとても、一人で消せる火ではない。これから一体、どうなるのだろうかという、不思議な気がして、炎が5センチ・10センチと伸び上がってゆくのを、しばらく見ていた。やがて、家の中から母が飛び出して来ると、「ヒーチャン早くっ!」と言って、走り出した。母は関東大震災の被服廠の生き残りだった。それで、家ではかねがね、母の後について逃げれば、大丈夫だということになっていた。門の階段を降りて道に出ると、すでに100メートル程先まで、鬼火のような火が、トンネルのように、一面に揺れていた。地面の火を地下足袋で踏みながら、火の中の坂道を50メートル程夢中で下った。曲角で最後に振り返った時には、我が家にも、隣近所にも、軒から一面に炎が昇っていた。(今にして思えば、自分の名前さえロクに書けないような連中が、英習字を始めている中学生の頭の上に、ナパームをばら撒いて行ったのだ。失敬な話だ!)

住む所が無くなったので、父の遠縁を頼って、関西の田舎町に移った。汽車が東京駅の構外に出ると、すぐに、眼の前に、地平線の果て迄、焼け跡が広がった。赤い焼け土と、赤錆の出た、ジャングルのように絡みあった鉄骨と、沢山の真っ直ぐな煙突とが立っていた。すし詰めの中車内に、「おーっ!」というような、低いうめき声があふれた。汽車は、ゴトンゴトンとゆっくり

走った。京浜工業地帯の焼け跡は、品川・川崎・横浜と、切れ目なく続いた。皆押し黙って窓外を眺め、声を出している人は、一人もいなかった。

幽霊の出そうな、ボロ家に落ち着いた。10年以上も、誰も人が住んでいなかった。父は、すぐに東京の仕事に戻った。地方都市の中学に入り、方言も少し判りかけた頃、テスト期間となった。明日はテストだという、1945年6月29日の真夜中、試験勉強をしていると、空襲が始まり、数時間で地方都市は燃え尽きた。朝になると、着の身着のままの罹災者が、赤い眼を腫らして、何人も、国道を10キロも歩いてやって来た。午後になると、吹きさらしの無蓋貨車に、びっしりと戦災者を詰め込んだ貨物列車が、飛ぶように山陽本線を西に下って行った。皆膝を抱え、顔を伏せて、風を避けて座って居た。

それっきり、学校には行かなかった。近くには、二人しか友達がいない。一人は同じ町にいる永野君で、今一人は、やや遠い山際の村の、「妙伝寺」の矢吹得治君である。永野君に数学の教科書を、長期の約束で借りた。どうせ、もう授業はないのである。町の雑貨屋で、商人の使う「出納帳」を一冊買った。ノートは、もうこの田舎町にも売っていなかった。赤インクを使って、「出納帳」の黒い文字の上に、罫も線も無視して、教科書を筆写していた。教科書には、新しく「三角関数」が始まっており、筆写しながら、最初から一人で勉強した。家には、電球が一つしかなく、切れると後がないので、なるべく電気をつけずに暮らしていた。朝になると、出窓の前に座り、筆写を始めた。出窓には、関西特有の細い木の格子と、黄色くなった紙の、明かり障子が入っていた。昼食にも夕食にも、刻んだジャガイモが半分入っている麦飯を食べ、夕方手元が暗くなるまで、筆写を続けた。ジャガイモがやたらと発芽するので、いつもひどい下痢をしていた。夜になると暗闇に座り、しばらく母と雑談をした。

永野君が、「先生が出校しろと言っている」と、うるさく言って来たので、一度だけ汽車に乗って、学校に行った。校舎の焼け跡の瓦礫を掘り返し、屑鉄を回収しろという。そんなことをしてみても、それを鉄砲弾に加工する工



場など、もうどこにも無いことを知っている。休み時間になったので、校内の天守閣の焼け跡に、一人で登った。散乱している焼け瓦の中から、池田の紋所の、「輪蝶（りんちょう）」の付いている丸瓦を三つ程拾い集めた。ついでに、天守閣の瓦を止めていた、長さ 30 センチ程の、四角い武骨な焼け釘を、三本程カバンに入れた。それっきり、二度と学校には行かなかった。

戦争が終わると、東京の松本俊夫君から、すぐに手紙が来た。松本君とは、中学に入学すると、最初の一週間で親しくなった。一月もすると、一度家に遊びに来た。彼が帰ると、母が、「あの子は、実に才気走った子だねえ！お前も、凄いい友達が出来た」と感嘆した。正方形に近い白い角封筒の上に、見慣れた、達者な彼の字が載っていた。嬉しかった。東京の杉並では、学校の近くの麦畑の道に、死にかけた老人が、もう幾日も倒れたままにいるという消息や、「いつ東京に帰るのか」という、問い合わせが書かれていた。

松本君とは、学内の課外活動が始まった時、相談して「美術部」に入った。こちらが貧乏で、水彩やスケッチで我慢していた時から、油絵を描いていた。本来、「理科Ⅱ類」に入り、医者になるコースだったのが、いつの間にか「美学」を通して、「映像芸術家」になった。気がついたときには、ベネチア映画祭で金賞・銀賞、カンヌ・ベルリンなど、ヨーロッパで 20 以上、国内では「数えたことない」程の受賞をしていた。ベネチア映画祭というのは、黒沢明監督が「羅生門」で入賞したところである。松本君は、今や超有名人で、彼が呼ばれている非常勤の学校など、何度聞いても覚え切れない程ある。それでも、年に一、二度、時間を作ってくれて、井の頭線の、さる小さな駅のそばのコーヒー店で、いつも ¥ 450 のコーヒー一杯だけで、三時間半程近況を話し合う。話が戦後のハラノヘッタ話になると、「友達どうして、縄で腹をきつく縛り合った。それでも我慢できないので、新聞紙を小さく千切って食べた。口の中が、印刷インクで真っ黒になった」というのが、彼のオハコである。「この話を今の学生にしてやると、ただゲラゲラ笑っているだけなんだからなあ」というサゲがつく。

父の便りには、アメリカ兵が大勢ジープに乗って、横浜から銀座通りに入

って来た、とあった。江戸幕府 300 年の「悪政」でも、江戸の街は焼けなかった。それでも、上野黒門町の「黒門」を盾にして、彰義隊が全員討ち死にをした。幕府に代わった「新政府」のもとでは、東京が、どちらを見ても焼け野原になったばかりか、ついに、一兵の彰義隊も出なかったものと見える。

高橋義孝という慶応大学の教授がいた。彼は、神田で生まれ、浅草の墓に入ったのだそうだが、こんな事を書いていた。「上野と言えは西郷さんの銅像だが、あの銅像に沢山ついている紙つぶて。あれは一体どうしたらつけられるのか、子供の私にはこれが長い間の疑問だった。紙を口の中でくちやくちやに噛んで、それを丸めて投げつけるということを知ったのは、中学生になってからである」。彼には、話の半分しか、判っていなかったようだ。事実、西郷の銅像には、体中汚らしい紙つぶてが、投げつけられていて、それが白く乾き上がって、所狭しと貼り付いていた。それには訳があった。

「黒門」の陰に、抜刀して集まった彰義隊に向って、「官軍」が盛んに鉄砲を撃ち込んだ。弾は黒門の厚い板に食い込むばかりで、一向に戦果が上がらない。弾が不足してくれば、彰義隊は門を開いて斬り込んでくるに違いない。そうなれば面倒だ。業を煮やした大村益次郎が、大砲を牽いてきて、黒門をおち壊した。彰義隊はたちまち鉄砲で撃たれて、討ち死にをした。その死体を積み上げた跡に、西郷の銅像を建てた（ということに成っている）。黒門町・御徒町の住人は、それを忘れなかったので、100 年近く経っても西郷の銅像に、くちやくちやに噛んだ、汚らしい紙つぶてをおつけていた。

この時、上野の山にとどろく砲声を聞きながら、福沢諭吉は講義の手を休めなかった（ということに成っている）。彼は、かねがね、「門閥制度は、親の仇でござる」と、自分の論旨の中に、論理的矛盾を含む発言を平気で繰り返していた。それで、「新しい時代が来た！」と思ったに違いない。しかしそれは、「私学もやはり、時の権力にコピルものであること。大学とは、所詮、浮き世離れした所であること」という、今日ではよく知られ切った、極く平凡な事実が、「始まった」だけの事ではなかったのか。福沢諭吉は沢山のこ

とを書いた。彰義隊は何を書いたか知らぬ。しかし、ニーチェによれば、「血をもって、また箴言をもって書く者は、読まれることを要求せぬ。諷誦されることを要求する」という。これでは、福沢諭吉にはとうてい勝ち目はない。

やがて住人が代わって、「黒門町」は只の「上野二丁目」となり、「御徒町」は「上野六丁目」「アメ横」となった。とうとう、「何も知らぬ都の職員」がやって来て、西郷の銅像を、亀の子ダワシで掃除した。同じく「何も知らぬ新聞」が、都内版に「西郷さんもサッパリ」などと書いた。ちなみに、大村益次郎の方は、靖国神社の鳥居の中で、上野の方角の「朝敵」を睨みつけながら、まだ怒っている（ということに成っている）。

東京に出てみると驚いた。かねて、父の便りに、物価が高いとは書いてあった。田舎町では、2 円、5 円という単位で物が動いていたが、東京には 10 円以下の単位は無かった。東京は食糧危機なので、仕事と復学以外の転入は、まだ認められていなかった。それで、父と二人だけで、神宮外苑の日本青年館の近くの焼け跡に、バラックを建てて住み付いた。食糧の配給制度は、殆ど崩壊していて、戦時中よりも遥かにひどかった。朝起きて、何も食べる物がないということも、何度もあった。そういう日には、学校を休んで、近所の闇屋に、昼頃に担ぎ屋が食糧を運んでくるのを待った。さつま芋が、一貫目 (3.75 Kg) 65 円という、信じられない値段になっていた。東京の街頭には、千葉方面から闇屋が運んでくるピーナッツと、伊豆方面から入るミカンと、近郊で取れるサツマ芋しかなかった。ピーナッツは、片方の手の平一杯位の量に、10 円の値を付けて、新聞紙で作った小さな袋に入れて、地べたに並べて売っていた。ミカンは一山 8 個程を上手に積み上げて、これも 10 円であった。サツマ芋は蒸したもの 4 切ればかりを、埃だらけな地面に新聞紙を敷いた上に並べて、10 円で売っていた。

時々、学校の帰りに新宿で途中下車して、東口・西口の闇市を歩いてみた。目当ては、一個 20 円の石けんを買うことである。石けんは、魚の油の匂いと、カセイソーダのきつい匂いがした。粘土のように灰色で柔らかく、

使うと一回でなくなった。街には、復員兵と戦災孤児が溢れていた。時々、闇屋が部厚い札束を、軍服の両ポケットに突っ込んで歩いている。一体何処から、こんなに沢山の札束が急に湧いてきたのだろうと思った。急拵えの屋台の上や、地べたには、軍服・飛行服・軍隊のシャツ・ズボン・靴下などが、沢山並んでいた。食糧品は、ピーナッツやサツマ芋ばかりで、所々で、米軍の残飯で作った雑炊を、ドンブリに入れて売っていた。ヨシズ張りの一角では、ガラスコップに入れた酒を、復員兵が立ったまま飲んでいた。そばでは、オンボロのポータブル・プレーヤーから、擦り切れたレコードのシャンソンが鳴っていて、まだ酒を飲んでいる復員兵の腕を、ストリートガールが引っ張っていた。

信濃町で電車を降りると、いつも2本10円のローソクを買った。夜になると、父と二人で、米軍の空きカンで作った鍋で、大根の葉のミソ汁に、フスマのメリケン粉で作ったスイトンの食事をした。食事が済むと、ローソクを、砲兵連隊で拾った弾薬箱の角に立て、ローソクの続く、きっかり3時間の勉強をした。すでに、三角関数は「展開定理」に入っていた。

時々、父の職場をたずねて、銀座に出た。尾張町の交差点に立つと、これがあの銀座かと思うような、光景になっていた。服部時計店は、昼間でもシャッターが下りていて、中は見えない。シャッターには、“Eighth Army Exchange Service, Tokyo PX”と白ペンキで書かれている。“PX”とは何のことか。やがて判ったことは、“Please Exchange”つまり食料品・雑貨の店である。もっと有り体に言えば、「酒屋」あるいは、「酒保」である。GIは本来生活費は一文もいらぬ。しかし、シャンプー・ピーナッツ・カンビールなどは自前となる。そんな店を日本人に見せたら、襲撃されるとでも思っ  
て、シャッターを閉めていたのだろう。交差点には、“X Ave ; GINZA St”という十文字の道路標識が立っている。日比谷から三原橋にゆく道は、“X Avenue”，新橋から日本橋にゆく通りは、“GINZA Street”という。その道路標識の下では、地べたに新聞紙を敷いて、魚河岸上がりのサンマを並べ、三匹10円で売っている。

向いの銀座三越は、戦災に遭って、灰色に崩れた外壁に、ガラスの無い窓の穴が並んでいる。日比谷公園には、“Moonlight Garden”と書いた、安手のアーチが建っていて、日本人は入れない。宝塚劇場には、“ERNIE Pyle”と看板が付けられている。アーニー・パイルはロバート・キャパと並ぶ従軍カメラマンで、太平洋戦線で戦死した。しかし、スペイン内戦の写真で有名になったキャパには、ヒューマニズムがあったが、アーニー・パイルは、「ライフ」誌契約の、只の米軍カメラマンに過ぎなかった。三原橋の角の佃煮屋は跡方もなく、一寸としたレストランのあった美松（みまつ）は、米軍のダンスホールになっていた。築地から、人家を掻き分けるようにして曲がり、蛸殻町・水天宮へと走って行った市電は、ばかばかしい程の広い焼け野原の中を、動いていた。

裏手に入ると、読売新聞社の低い階段の上には、殺気立った一群が集まっていた。読売は空襲で印刷機を焼かれ、経営者はやる気をなくし、危機にあった。いわゆる「読売争議」である。内堀の向い岸にある、朝日新聞社が印刷を引き受け、読売の組合員の越年資金も出し合っていた。朝日にも、2.26事件の時、青年将校がやって来て、印刷機の上から砂をばら撒いて行ったので、他社の援助を仰がなければならなかったことがある。報道は真実を伝えて来たか？ トンデモナイ！ そんな事をしたら、現在だって、一週間で内戦が起きるだろう。

東京駅の、緑色の、丸屋根のドームも焼け落ちて、穴が明いていた。これは、かなり早い時期に、現在の直線的な三角形の屋根に造り直した。当時、手を抜いた、詰まらぬ設計との印象を受けたが、その思いは今でも同じである。夏のバラックは暑く、はだかの肩に濡れ手拭を掛けて過ごした。手拭を3回程絞り直すと、夕方になった。冬には、隙間風が入り、朝眼を覚ますと、かい巻きの上には、うっすらと雪が積もっていた。

軍人・軍部が、日本を軍事的・政治的破滅の淵に突き落としたとするならば、政府・日銀・大蔵省・財界・産業界は国民を、経済的破滅の淵に突き落とした。闇市を歩いていると、一体何処から、急に、こんなに札束が湧いて

きたのかと、いつも不思議に思った。当時は、ひた隠しにしていた事が、サンフランシスコ条約の頃から、判って来た。敗戦と決まると、政府・内閣・日銀は、戦時公債と、軍関係の支払い債務補償など、まだ契約しただけの代金さえ、軍隊・軍需産業家に対し、全額支払ったのである。最早、一発の撃ち合いもなく、一機の戦闘機さえ造っていないのにである。当時の、総理大臣も誰だったか判っている。一方では、本土決戦のために備蓄した、軍需生産資材・食糧・衣料を勝手に処分した。当然、凄まじい通貨インフレが起きた。日銀は札束を刷りまくった。よくもあれだけ、紙とインクがあったものだ（おそらく以前から印刷してあったのだろう）。軍事行動が戦争犯罪だと言うのなら、この経済行動も、国民に対する戦争犯罪である。

通貨インフレが、国民に対する悪質な犯罪であるという理由は、同じ通貨を手にする国民が受け取る、価値の不平等性にある。同額面の紙幣を、最初に受け取る者と、多数の末端庶民が受け取る迄の間に生じる、驚くべき実効価値の下落である。最初の者に、十分な価値を与え、末端の者の財産を、実質的に取り上げる。これは泥棒と同じだ。1943年に生まれた、スティグリッツ教授などに、何が判る！ 次回に詳しく述べる予定であるが、経済学に完全に欠落しているものは、実に、この「時間・運動の基本的概念」である。

印刷局から出て来た札束を、最初に受け取った、軍人・軍事産業家がそれを何に使ったのかは知らない。しかし、庶民が受け取った時には、食糧を買う以外にゆとりは無かった。かくて札束は、闇屋と農家の懐に納まった。闇屋や農家は、銀行とは取引がない。札束は日銀には戻って来ない。何も産業がなく、企業家は働かず、国家の収入が無いからである。それで、日銀はまた札を発行する。敗戦を挟んだ、1944（昭和19）年から、1949（昭和24）年までの間に、卸売り物価指数は、実に、9000パーセントのハイパーインフレとなっていた。東京はその中心にあった。

彼等の犯罪には、上塗りがある。1946（昭和21）年3月、政府・大蔵省・日銀は、インフレ収束の為と称し、預金封鎖と新円切換に出た。発行するば

かりで、回収不能に陥った札束の無効を、今度は、一方的に宣言したのである。これによって、小は近郊の農家・闇屋から、大は戦前の資産家まで、およそ国を信じて、現金と国債で資産を形成していた者は、皆、無一文となった。我々庶民は、一回は軍事的敗北の打撃を受けた。しかし、経済的打撃の方は、二回もやってくれた。それも、戦争が終わってからである！

国債 (bond) の償還が困難になれば、どこの国の政府も、何時も紙幣を増刷する。それによって、負債額面の実効価値が下がるからである。ドルのたれ流しも、すでにこのフェーズにある。次に来るものは、言わずと知れた、「新ドル」への切替である。60年代の大統領は、「必死になって」、「真面目に」この問題を処理しようとした。それに続く連中は、ただこの「狡猾」な意図を、いかにして隠すかというだけである。ホワイトハウスの主人が替わる度に、どこどかと入れ替わる、御用経済学者達。それを、彼等は経済学の「パラダイムの転換」などと称して来た。ニクソンは、まず、ドルをフロートさせる事から始めた。「軍人上がりの有能な企業家」が、どうしてこんな事が判らずに、ボンドや在米資産を買うのだらうと、不思議に思っていた。ましてや、“Born to Spend”の連中など、何も判らなくても当然である。

当然、世界中は大きな混乱になるだろう。政府・日銀・大蔵省が何かしてくれるだろうか。彼等は、われわれに、地べたに並べたサンマを食わせたような連中の、末裔なのである。「歴史は繰り返す。一度は悲劇として。二度目は茶番劇として」。その時には、われわれ庶民に何が出来るか。何も出来はしない。ただ出来ることは、また、大根の葉にみそ汁のスイトンで夕食をし、ローソクを立てて、雑草のように生きるだけである。あの時は、三角関数の展開定理を勉強していた。今度は、多分、プリゴジンの本を読む事になるだろう。50年も経てば、こっちにだって、それなりの進歩はあるのだ。

(つづく) (1995年6月17日 記)

## APPENDIX : Greenfields

Once there were green fields

Kissed by the sun  
 Once there were valleys  
 Where rivers used to run  
 Once there were blue skies  
 With white clouds high above  
 Once they were my love that everlasting love  
 We were the lovers who strolled  
 Through green fields

Green fields are gone now  
 Parched by the sun  
 Gone from the valleys  
 Where rivers used to run  
 Gone with the cold wind  
 That swept into my heart  
 Gone with the lovers  
 Who left their dreams depart  
 Where are the green fields  
 That we used to roam

I'll never know one made you run away  
 How can I keep searching  
 When dark clouds hide the day  
 I only know there's nothing here for me Nothing in this wide world left for me to see

But I'll keep on waiting till you return  
 I'll keep on waiting until the day you learn  
 You can't be happy  
 While your hears from the roam  
 You can't be happy until you bring it at home  
 Home to the green fields and me once again

## REFERENCES

[歴史関係]

- 1) 「歴史とは何か」 E. H. カー 清水幾太郎訳 (岩波新書)



- 2) 「ローマの歴史」I. モンタネッリ 藤沢道郎訳 (中公文庫)
- 3) 「ローマ帝国衰亡史」ギボン 中野好夫他訳 (筑摩書房)
- 4) 「東芝マツダ研の戦時研究の軌跡」藤田 秀 総研年報 No. 1 ('88 : S63)
- 5) 「現代物理学史の危険性」藤田 秀 総研年報 No. 3 ('90 : S 65)
- 6) 「現代物理学史の危険性をめぐる座談会」藤田他 総研紀要 Vol. 8 ('90 : S 65)
- 7) 「事実とは何か」教養論叢 Vol. 4 ('92)
- 8) 「明治維新とイギリス商人」杉山伸也 (岩波新書)
- 9) 「戦後日本の歴史」井上 清 (現代評論)
- 10) 「私は貝になりたい」加藤哲太郎 (春秋社)
- 11) 「日本のいちばん長い日」半藤一利 (文芸春秋)
- 12) 「第二次世界大戦下のヨーロッパ」笹本駿二 (岩波新書)
- 13) 「ローマはなぜ滅んだか」弓削 達 (講談社現代新書)
- 14) 「明治精神の構造」松本三之介 (岩波書店)
- 15) 「大正デモクラシー」松尾尊充 (岩波書店)
- 16) 「近代民主主義とその展望」福田歓一 (岩波新書)
- 17) 「菊と刀」ベネディクト 長谷川松治訳 (現代教養文庫)
- 18) 「レイテ戦記」大岡昇平 (中公文庫)
- 19) 「小林秀雄の流儀」山本七平 (PHP 文庫)
- 20) 「朝日新聞の戦争責任」安田将三, 石橋孝太郎 (太田出版)
- 21) 「大江戸ぶらり切絵図散歩」縄田一男 (PHP 研究所)
- 22) 「ミカドの肖像」猪瀬直樹 (小学館ライブラリー)
- 23) 「日本陸軍歩兵連隊」新人物往来社戦史室 (新人物往来社)
- 24) 「二・二六事件」高橋正衛 (中公新書)
- 25) 「太平洋戦争」池田清編 (河出図説シリーズ)
- 26) 「世界の軍用機史」(グリーンアロー出版社)

[哲学関係]

- 1) 「この人を見よ」F. ニーチェ 西尾幹二訳 (新潮文庫)
- 2) 「ツアラトストラかく語りき」上下 F. ニーチェ 竹山道雄訳 (新潮文庫)
- 3) 「善悪の彼岸」F. ニーチェ 竹山道雄訳 (新潮文庫)
- 4) 「ニーチェ」三島憲一 (岩波新書)
- 5) 「ボーヴォワールとサルトルに狂わされた娘時代」B. ランブラン 坂田訳 (草思社)
- 6) 「フランス現代哲学の最前線」C. デカン 広瀬浩司訳 (講談社現代新書)

## [科学史関係]

- 1) 「我国における半導体研究の資料集」 藤田 秀・国府田隆夫編（中央学院総研 '89 : H1）
- 2) 「日本における半導体研究」 藤田 秀・国府田隆夫編（開成出版'92 : H4）
- 3) 「インソールの制度化」 藤田 秀 中央学院総研年報 No. 3 ('89 : H1)
- 4) 「トランジスタ開発物語」 中野朝安 東京電機大学出版局 ('93 : H5)
- 5) 「半導体物語」 新田尚道「朝日技報」 ('94 : H6)
- 6) 「アイザック・ニュートン」 I・II ; R・ウエストフォール 田中一郎他訳（平凡社）
- 7) 「アインシュタイン伝」 矢野健太郎（新潮選書）
- 8) 「天才の精神病理」 飯田 真・中井久夫（中央公論）
- 9) 「資料保存と現代物理学」 藤田 秀 中央学院教養論叢 Vol. 5 ('92 : H4)
- 10) 「キュリー夫人」 O. ヴォウチェック 小原いせ子訳（恒文社）
- 11) 「コペルニクス」 Y. アダムチェフスキー 小町真之・坂元多共訳（恒文社）
- 12) 「ヨーロッパ科学史の旅」 高野義郎（NHK ブックス）
- 13) 「ガリレオ」 田中一郎（中公新書）
- 14) 「オープンハイマー」 中沢志保（中公新書）
- 15) 「特別科学組」 佐々木元太郎，平川裕弘（大修館書店）
- 16) 「科学」 宮崎市定（中公新書）
- 17) 「オープンハイマー」 池田夏樹訳（白水社）

## [東京空襲関係]

- 1) 「日本空襲」 平塚柁緒編（草思社）
- 2) 「GHQ 東京占領地図」 福島鉄郎編（雄松堂）
- 3) 「多摩の空襲と戦災」 小沢長治（けやき出版）
- 4) 「東京大空襲」 早乙女勝元（岩波新書）

## [ドイツ関係]

- 1) 「東欧再生への模索」 小川和男（岩波新書）
- 2) 「統一ドイツのゆくえ」 坪郷実（岩波新書）
- 3) 「二つの戦後・ドイツと日本」 大獄秀夫（日本放送出版協会）
- 4) 「ヒトラーを生んだ国」 八田恭品（新潮選書）
- 5) 「ドイツにヒトラーがいたとき」 篠原正瑛（誠文堂新光社）
- 6) 「スターリン主義を語る」 C. ボッフア，G. マルチネ；佐藤紘毅訳（岩波新書）
- 7) 「わがマレーネ・ディートリヒ伝」 鈴木 明（小学館ライブラリー）

- 8) 「ヒトラーの戦い・舞い上がる鷺」 児島 襄 (小学館ライブラリー)

[フランス関係]

- 1) 「PARIS」(旅行案内: 同朋社出版)
- 2) 「ナチ占領下のフランス」 渡辺和行 (講談社)
- 3) 「ルーヴル・美と権力の物語」 小島英熙 (丸善ライブラリー)
- 4) 「ジャンヌ・ダルク」 村松 剛 (中公新書)
- 5) 「絵で見るフランス革命」 多木浩二 (岩波新書)
- 6) 「フランス革命小史」 河野健二 (岩波新書)
- 7) 「ボーヴォワールとサルトルに狂わされた娘時代」 B. ランブラン 坂田訳 (草思社)
- 8) 「ラ・マルセイエーズ物語」 吉田 進 (中公新書)
- 9) 「フランス史」 井上幸治編 (山川出版社)
- 10) 「ルイ十五世」 G. グーチ 林健太郎訳 (中央公論社)
- 11) 「ナポレオン伝説の形成」 鈴木杜幾子 (ちくまライブラリー)
- 12) 「ジャン・ギャバンと呼ばれた男」 鈴木 明 (小学館ライブラリー)
- 13) 「プロヴァンス」 牟田口義郎, 佐々木三雄・綾子, 熊瀬川紀 (新潮社)
- 14) 「オルセ美術館」 丹尾安典, 南川三治郎, 佐々木三雄・綾子, 熊瀬川紀 (新潮社)
- 15) 「フランス革命」 池田理代子 (新潮社)
- 16) 「ルーブル美術館」 赤瀬川原平, 熊瀬川紀 (新潮社)

[アメリカの政治・経済・歴史関係]

- 1) 「アメリカ史」 上下 アリステア・クック 鈴木健次他訳 (NHK ブックス)
- 2) 「現代アメリカの自画像」 鈴木 毅 (NHK ブックス)
- 3) 「アメリカ歴史の旅」 猿谷 要 (朝日選書)
- 4) 「Understanding the United States」 MoConnell (Kinseido)
- 5) 「大転換」 藤原直哉 (綜合法令)
- 6) 「1995 年合衆国破産」 H. フィギー Jr 竹村健二訳 (クレスト社)
- 7) 「アメリカの没落」 D. バーレット・J. スティール 堺屋太一訳 (ジャパンタイムス)
- 8) 「アメリカのジャーナリズム」 藤田博司 (岩波新書)
- 9) 「アメリカ黄昏の帝国」 近藤栄一 (岩波新書)
- 10) 「現代アメリカの保守主義」 佐々木毅 (岩波書店)
- 11) 「マッカーシズム」 R. ロービア 宮地健次郎訳 (岩波文庫)

- 12) 「常温核融合スキャンダル」 G. トーブス 渡辺 正訳 (朝日新聞社)
- 13) 「アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか」 R. タナカ 山岡洋一訳 (草思社)
- 14) 「原爆投下決断の内幕」 上下 ガー・アルペロビッツ 鈴木他訳 (ほるぷ出版)
- 15) 「アインシュタイン伝」 矢野健太郎 (新潮選書)
- 16) 「アインシュタインが考えたこと」 佐藤文隆 (岩波ジュニア新書)
- 17) 「The Best Loved Poems」 H. Felleman (Doubleday)
- 18) 「アメリカの鏡・日本」 H. ミアーズ 伊藤延司訳 (メディアファクトリー)
- 19) 「ハーバード・ビジネス・スクールにて」 土屋守章 (中公新書)
- 20) 「アメリカ産業社会の盛衰」 鈴木直次 (岩波新書)
- 21) 「パクス・アメリカーナの光と陰」 上杉 忍 (講談社現代新書)

[経済学関係]

- 1) 「国富論」 アダム・スミス 大河内一男訳 (中公文庫)
- 2) 「フランソワ・ケネーと重農主義」 フランス国立人口統計学会 石井良明訳 (丸善)
- 3) 「貧乏物語」 河上 肇 (岩波文庫)
- 4) 「経済学入門」 千種義人 (同文館)
- 5) 「経済学の形成」 飯塚一郎, 都通一郎 (産業経済研究所)
- 6) 「貨幣学説前史の研究」 飯塚一郎 (未来社)
- 7) 「世界食糧資源論」 Z. ラッセル 藤田秀夫, 賀川豊彦訳 (新潮社)
- 8) 「経済学」 上下 サムエルソン 都留重人訳 (岩波書店)
- 9) 「マクロ経済学」 スティグリッツ 薮下史郎他訳 (東洋経済新報社)
- 10) 「アダム・スミス」 高島善哉 (岩波新書)
- 11) 「ケインズ」 伊東光晴 (岩波新書)
- 12) 「サッチャー時代のイギリス」 森嶋通夫 (岩波新書)
- 13) 「イギリスと日本」 森嶋通夫 (岩波新書)
- 14) 「続イギリスと日本」 森嶋通夫 (岩波新書)
- 15) 「思想としての近代経済学」 森嶋通夫 (岩波新書)
- 16) 「世界経済をどう見るか」 宮崎義一 (岩波新書)
- 17) 「これからの経済学」 佐和隆光 (岩波新書)
- 18) 「経済学とは何だろうか」 佐和隆光 (岩波新書)
- 19) 「経済学の考え方」 宇沢弘文 (岩波新書)
- 20) 「シュンペーター」 伊東光晴, 根井雅弘 (岩波新書)
- 21) 「大恐慌のアメリカ」 林 敏彦 (岩波新書)

- 22) 「ドルと円」 宮崎義一 (岩波新書)
- 23) “Down, Down, Down” Newsweek, March 20, 1995
- 24) “A Game of Chicken” Newsweek, April 17, 1995
- 25) 「'95 米国経済白書」 エコノミスト (毎日新聞)
- 26) 「バブルの経済学」 野口悠紀雄 (日本経済新聞)
- 27) 「昭和恐慌」 長 幸男 (岩波書店)
- 28) 「計量経済学入門」 宮川公男 (日本経済新聞)
- 29) 「経済数学教室」 小山昭男 (岩波書店)
- 30) 「価格変動のマクロ経済学」 福田慎一 (東大出版会)
- 31) 「半導体業界のシリコン・サイクル論」 大貫正實 中央学院商経論叢 Vol. 8  
1993
- 32) 「デリバティブ」 日本経済新聞社編 (日本経済新聞社)
- 33) 「良いデリバティブ悪いデリバティブ」 今井 澂 (きよし) (東洋経済新聞社)
- 34) 「図解デリバティブ」 今井 澂 (中経出版)
- 35) “The West at War” Newsweek, July 31, 1995
- 36) 「日米円高破産」 水谷研治 (PHP 文庫)
- 37) 「経済学の基本がわかる本」 入江雄吉 (PHP 文庫)

(以上)